

日本文学全集
35

野間宏

真空地帯・暗い絵・顔の中の赤い月
肉体は濡れて・崩解感覚・他

河出書房

野 間 宏



カラー版日本文学全集 35

1969

昭和四十四年七月二十日 初版印刷
昭和四十四年七月三十日 初版発行

定価 七五〇円

著 者 野 間 宏 ひろし

発行者 中 島 隆 之

印刷者 草 刈 龍 平

装幀者 亀 倉 雄 策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製 本 加藤製本株式会社

製 函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロース工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地

電話・東京(292)三七二一(大代表) 振替・東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

野間 宏

真空地帯 五

暗い絵 二五

顔の中の赤い月 二五

肉体は濡れて 二五

崩解感覚 三〇三

詩集 星座の痛み抄 三二五

注	解	色刷口絵	色刷挿画	暗い絵	顔の中の赤い月	崩解感覚
年譜	説	真空地帯				
釈						
紅野敏郎	森川達也	多田道太郎	榎本良介	浜田知明	朝倉 撰	北川民次
三三	三三	三五				麻生三郎

野
間
宏

真空地帶

第一章

木谷上等兵が二年の刑を終って陸軍刑務所から自分の中隊にかえってきたとき、部隊の様子は彼が部隊本部経理室の使役兵として勤務中に逮捕され憲兵につられて師団司令部軍法会議に向ったときとは全く変ってしまった。彼は二年前軍隊にはいつてからはじめて巻脚絆をつけることなく衛門をつれ出されたが、巻脚絆も帯剣もつけていない代りに上衣の下に隠した両手に手錠を、その腰に捕縄をつけた身体をふって見上げた衛門横のボブラの木はいまだ切倒されていなかった。彼とともに入営した現役兵は大半中支へ渡ってしまったっており、部隊には次々と召集された幾種類もの補充兵の他に第一回学徒出陣兵はいつていた。彼が入営した日身体検査のあとで内務班で支給された饅頭パンも、彼が刑務所で炊事囚として土曜日、祭日につくらされた饅頭も部隊には見えなかった。もちろん彼もまた同じようにこの期間のうちに非常に変ってしまった。ただたんに彼の肩の上には以前のうかつていた星三つの肩章がなくなっているというだけではなく、もっとも自分の肩の星が三つから二つに減ってしまったということは、木谷に、腕の骨をぬきとられたような感じをあたえたのだが。

朝はやく石切の刑務所から護送自動車で送られてきた木谷一等兵が刑務所看守とともに控室で釈放時間をまつているとき、軍法会議警手とともにいつてきた出迎えの中隊人事係准尉は、彼の不在中他部隊

から転任してきたらしく、彼には全然見おぼえがなかった。そして准尉の後についておすおすといつてきた星二つの引率兵は見るからにひよる高く、帯革の下は服は幾重にも襷がよつていて、如何にも不恰好な兵隊だった。……すでにこのような場面には、たびたび出くわしていた人事係准尉は、別にこの師団司令部の建物や出入りする法務官や廊下にちがつく手錠の輝きなどにおびやかされなかったし、自分の眼の前にあらわれるはずの刑余者について先日來報告書類を十分研究してあったのだらう、いくら無頓着な顔をつきつけて一べつした。木谷の頭は瞬間、反射的にたれた。しかし彼は警手達がいってくるや当然のように態度をかえた看守に対する怒りでいつぱいだつた。

看守はつづけて言った。「なあ、木谷、しつかりやれよな……。もう、これまでのような気は、どんなことがあつたつて、ぜったいに起すんじゃないぜ……」彼の皺の寄つた年寄のようにしなびた感じの鼻は、上の方に引きあげられていた。「なあ——、いいかい？」それは二年もの間移動することなく、同じ刑務所にとどまつて刑をうけてきた囚徒兵の前では、看守が口にするのできるような調子ではない。看守が刑務所内で官品を着服するためには、絶対に古参囚徒の協力が必要であつた。木谷一等兵はこの一見寛容でいて、しかも嚴格、そしてその本当の内容は狡猾という看守の手本のような男が、木工材料を自分のものにせしめるために選んだ協力者だったのだ。看守は長い曹長剣をならした。

若い警手は看守の方を見向きもしなかった。彼は身軽に木谷の身の廻りを一巡して見てやつた。彼は黒い腕被いをしていて、神経質な顔をしていた。「さあ……よし。もう、手錠はとつてもらつたんだね……つらかつたらう。領置品は……よし、もらつたな……。じゃ、すぐ、つれてかえつてもらつたらいい。……中隊へかえつてからの注意はさつき言つておいたとおりだぜ……もう、くつかえしはしないけど。」彼の指は細く胸の上あたりでよく動いた。「もつと散髪はしていねいにしてもらわないのかなあ……今日は隊にかえるんだから……」

「さあ行こう……」看守にいて重な挨拶をすませた准尉は、木谷が兵隊のもつてきた帯剣をつけ終ると言った。彼は控室の奥にある網をはった留置場をのぞいていた兵隊をよんで、最後に儀礼のためのように、警手から「部隊にかえった当分の間は食物に注意してやってほしい。……刑務所の給与は量が規則できまっているから腹が一定しているが、刑が終って中隊にかえると不規則になって腸をこわすものがあるから。」という注意をききとった。木谷は、そのような温和な准尉の態度から、その人間をどう判断していいかわからなかった。しかし、人事係准尉という位置が彼には恐ろしかった。これは彼が取り入れなければならぬ人間だった。

彼らは大阪城のなかの幾つもの城門をぬけて歩いて行った。准尉は部隊の敬礼をとるのが面倒なので二人からいくらかはなれるようにして歩いた。そこで引率の内村一等兵は、軍隊礼式令を幾度か頭の内で整理するかのようなあぶなげな号令をかけて、歩調をとった。「歩調とれ。頭あ……右……直れ、歩調止め……」

木谷は歩調を取って頭を右に向け、向うからやってくる軍刀の将校に注目した。彼は次々とすれちがう上官達の眼が、じっと自分の身体を見守っているのを知っていた。彼は今日もやはり巻脚絆をしていなかったから。彼は帯剣だけを準備して巻脚絆を忘れてきた一等兵に不満を感じた。彼は将校達の眼が巻脚絆のない自分の足をすくめるのを感じていた。たしかに彼はそれだけで陸軍刑務所出所者なのだ。

交叉点の混雑で准尉との距離がとおくなるとき、木谷は引率者に言った。

「おい、お前、いつの兵隊なんや?」

「はい、去年の五月の兵隊です。」

「補充兵か?」

「はい?」

「俺のことをお前知ってるのか? 隊できかされたか?」

「いいえ……自分は何もまだきいておりませんです。」

補充兵の頬は寒気のために赤かった。彼は物を言うたびに女のように首を左右にゆり動かした。彼が古い兵隊でないということは明らかなことだったが、それはこちらの口調をうけとめる相手の腰の弱い言葉の調子にそのたしかな手応えがある。

「現役はいないのかい?」

「はあ……おりますです。」

「何?……いや……四年兵だぞ……十×年にはいった……?」

「はあ……いいえ……現役の三年兵殿であります……」

「四年兵は一人もいないのか?」

「はあ……一人も、おいでになりません……」

木谷が出獄の時期が近づくにつれて、刑務所のなかで一番よく考えたことは、やはり自分が原隊に帰った場合、自分を知っているものか一人もいなければいいかということであった。彼は自分の同年兵達が大陸にでて行ったということは、最後に隊長がよこした手紙で知っていたが、或いはそのうちの少数のものがまだのこっているのではないかと恐れていた。

木谷は話しながら、前にいる准尉の方を見つづけていた。背の低い体の大きくない、左右に肩を揺って歩く准尉。彼のもっともおそれなければならぬのは、隊長と准尉の二人であり、殊に准尉だった。そしてこれがその准尉だ。

『飲み助じゃない? こいつはあかん?』と彼の身体は判断していた。固い融通性のない准尉にちがいないのだ……ところが、あの、馬鹿みたいな顔はどういうのだ……准尉は交叉点のところで信号を待って、ぼんやりとどこを見ているかわからぬような眼をして、空を見上げていたが、その顎は、ゆるんだまま前につき出されていた。彼は左横の方からやってきた背の高い少尉に思いつきのように敬礼をした。それからふいと木谷の方を突然ふりかえった。木谷は不意をおそれたようにぎくつとして、口をつぐんだが、准尉はもう振り向きはしなかった。

准尉は先刻師団司令部の控室でも木谷が昨夜から予想していた長々しい説教や、訓話を彼にしなかった。いや訓話ばかりではなく、ただの短い注意さえ与えようとはしなかった。さらに腰かけていた木谷が立ち上った室内の敬礼に対するまともな答礼さえしなかった。「うーん。」と彼は鼻のところで言った。しかし木谷は准尉を固い人間だと思った。木谷の大きな眼は狡猾そうに准尉の頸筋の辺りをちらちらながめた。

「ケー。」衛兵所の控えの兵は一斉に起立しながら、口をあけた。准尉は直立している衛兵司令の方をちらとみて、そちらへ近よって行った。「ホ隊だが、つれて行く……。日々命令廻ってきてるだろう……あいつ。木谷利一郎。」

「直レ……。はあ……きています……通って下さい……休メ。」衛兵司令は向き直って言った。

すでに経理室の建物はすぐ右手のところにあった。そこには木谷の憎しみの交じった思い出がこめられているのだ。

衛門をはいった引率者と木谷は准尉のうしろにつたって手続きが終るのを待っていた。

「よし、通れ。」衛兵司令は改めて、二人に向って強い言葉をかけた。准尉は二人の方に顔を振った。「よし、俺といこう……内村、御苦労……先にかえってくれ……木谷は俺がつれて行く。」二人は左手の連隊本部の二階へ上って行った。二人は曲りくねった事務室の一番奥のところまではいって行った。

二

「何だよ……ちよつと、待てんか？」本部勤務者達のぜい沢と誇りであり、各中隊の羨望をそその副官室のお喋りと暖炉とを恋しがって集まってきた勤務者達に取りまかれていた連隊副官は長い間二人をまたせておいて、時々振り返った。彼は他のものもっていないビロード張りの回転椅子に体をくずして腰かけていた。彼は副官勤務に如何に

もふざわしく世俗的で柔和だった。

「ホ隊ですが、木谷利一郎をつれてかえって来ました。」准尉は声をおさえて繰り返した。

副官の前の黒いストープには火がもえていた。副官は、顔だけそちらに向けて、何も言わなかった。彼の顔の上には笑いの跡がのこっていた。准尉の後に編上靴を右手にもち頭をたれて姿勢をつくっていた木谷は火をみながら、帰ってきたと思っていた。ここは二年前彼が逮捕されて憲兵隊に留置される前につれてこられたところだった。そのとき彼が申告した副官は大尉だったが、いま副官は中尉だった。ストープの火口の隙間からもれる火をみる木谷のうちは、もはや二年前とちがって別に恐怖はないのに、警戒心のために肉体的なおびえが生れていた。……左横の事務機の列には曹長達が体を机の上のり出して、複写紙を重ね合わせては、大きなブリキの下敷を動かした。彼らは兵隊用の靴下を何枚も重ねてはき、当番兵の保革油で十分手入れをした皮の薄い上靴（スリッパ）を机の下ではいていた。

「おい、はやく出すものは出せよ……ここじゃない？ 中隊だ……？ ごまかすな！ 当番に取りにやらせるぞ……。出すんだぞ……出さない」と今度の酒の配給券は、お前の方にはもう廻さんぞ。」

副官はストープの煙突の向うに腕をくんで足をつき出している背の高い少尉に向って、昨夜の加給品のパンを出せと言っていたが、まだ自分の後にまっている二人を眉をひそめた顔でふりかえった。

「ああ……何だ……まだいるのか……後じゃいのか……うん、……木谷だったか。」

「木谷利一郎でありますが。」准尉は抑揚のない声をつくって言った。

「うん、そうだな……後ではいのかんのか……」

「申告だけさせたいと思っておりますが。」

「申告？……そうか……じゃあ……よからう……」

准尉はふりかえって木谷に言った。「木谷、副官殿に申告申しあげろ。」

木谷は一座のものが自分の顔を一度に注視したことに基づいた。彼は瞬間自分の顔が、あの監房の四角い窓から飯盒をはこぶごとにつき出される禁錮囚の顔であるような錯覚におそわれた。それらの顔は陸軍刑務所の厳しい監房規則のために、ほとんど変形し、しほみ、脂肪を抜かれていた。木谷は懲役囚で刑務所内で訓練をうけていたので、自分の顔にはそのような跡形はないとよく知っていたが、彼の顔はみるみる熱をもってきた。

「申告します。」

陸軍一等兵木谷利一郎は昭和××年一月十×日附をもって仮釈放となり原隊復帰を命ぜられました……。ここにつししんで申告します。」副官はようやく気づいたのだ。これが三日前師団司令部法務部から連絡のあった木谷利一郎であるということ。彼は力をしばって不動の姿勢を取っている相手の顔をじつとみつめたが、前にのり出した。彼は相手の鼻根部がふくれていて、据っている鼻、厚い少しつき出たインドネシア型の唇、四角い額、ねじれたり、まばらの毛がところどころにかたまっている薄白い頭、などから、一人の罪人の顔を掘り出してこようとしたが、眼をそらせた。

「仮釈放か？」

「はい。」

「何だったんだ？」

「……………」

「何年だったのだ？」

「二年三カ月であります。」

「それで仮釈放でできたのだな。」

一座のものは、いまになってようやく仮釈放という言葉の意味が解つたらしかった。彼らはつづけていた話をやめた。長靴をつけた足をひろげて両手をくんで前につき出していた顔色の悪い動員室の少尉は、まともに木谷の方に向き直った。

「何だったんだ？」

「はい……………」木谷は両手をゆるめてそれをのぼした。「懲役であります……………」

「いや……………」そうじゃない……………」何をしたんだったな……………」

「はあ……………」

「その点は、後ほど、自分の方から報告いたすことにする考えでありますから。」准尉は再び言葉を抑えていった。彼はすました顔をつくっていた。そしてそれが将校達に対する彼の輕蔑の表現だった。

副官は准尉の方をじつとみた。

「はあ、後ほど。……………」中隊へつれてかえって、休ませてやりたいと考えておりますから……………」後ほど、また、連れて参ることに致しますから……………」今日師団の法務官殿の方から御注意がありまして今日は、これを静かにしておいてやってくれと承っておりますから……………」准尉の態度はすでにつししみぶかいものだった。

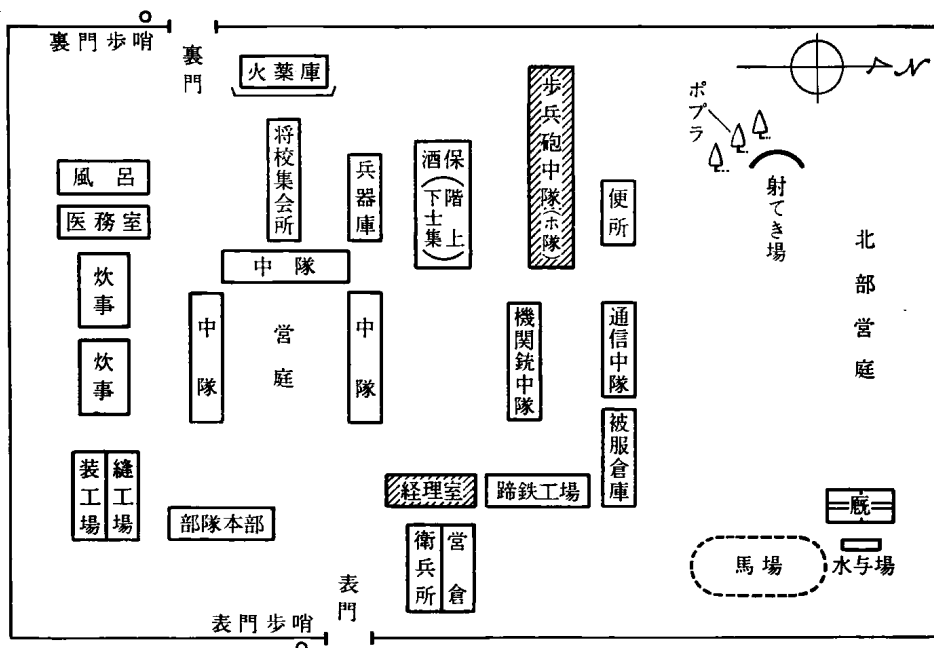
「副官殿、部隊長殿がちょっときてほしいとおよびであります。」後のドアをあけてはいってきた部隊長の当番兵は、新しい服をきて、新しい襟布をしていた。副官は、不可解な顔をして准尉をみたが、「よし。」と言った。

「木谷、もう、いい……………」かえれ……………」准尉は副官に敬礼して言った。頭をたれて副官の方をぬすみ見していた木谷は、頭をさらにたれた。が彼はすでにすばやく下においた靴をとりあげていた。彼は自分の後の方で、事務曹長の一人とよびとめられた准尉の話し合っている言葉をきいた。

「准尉さん、立派はん、あれ、あんたの隊に配属だったか？」

「配属だったかとは何だ……………」お前の方で勝手に俺の隊にあんなものをよこしときながら……………」ほんまにえらいもんを、かかえこませやがったぜ……………」

木谷は本部をでて、經理室前をとおり、坂をのぼって中隊へ行くとき、准尉との距離をたえずはかるようにして歩いて行った。



兵営の略図

三

木谷は中隊の事務室で中隊長がくるのを長い間待っていた。彼は部屋真正面の目当りのいい窓ぎわにすえられた准尉の事務机の前に小さい長椅子をもってきて、頭をたれて坐っていたが、准尉は木谷が入隊後すぐに書いた身上調書を人事係助手の上等兵に出させ、それにもとづいて二、三の書き込みをしたきりだった。

「父親は七歳のときになくなったんだ……」

「はあ、そうであります。」

「すわったままでよろしい。……母は再婚、……保護者は兄貴と……兄さんはお前ができたこと知っているか？」

「知っているはずであります。向うから家の方へ知らしてくれとりますから。」

「兄さんはいそがしいか……鶴見橋……西成区で帽子屋……。お前は兄さんの家にいたんだなあ……地方にいたときには……」

「はあ、そうであります。」

木谷は話しながら再び准尉の肌合いをうかがっていたが、事務室で准尉はのびのびとし部屋中を支配し、おさえ、部屋の空気は彼のところで換流していた。左の窓下の古い明治時代の色塗りのタンスのような物入れの前には給与と金銭出納責任者の曹長がいた。「准尉殿、今日は朝はやくから、出てかれて、おさむうございましたでしょう。こっちゃあ……もう、きょう日、気がたるんでしもうて、衛門前で駆け出すこっちゃ。」彼は言った。「いや、なに！」准尉は言った。曹長のところに話しにきていた被服係の軍曹は曹長の机の上に首をつこんでいた。「当番、中隊当番。」彼はどなった。「当番、何をぼやぼやしてるか。准尉殿が朝早くから、師団まで行ってかえってこられたのが分らんのか……。ぬくぬくとストープのところに猫みたいになろうなりやがって。中隊当番！ 准尉殿、お茶をひとつどうです……。こういうんだ。熱いお茶をもって行くんだ。当番、わかったか。こら、な

あ、こうすれば俺は今度の日曜の外出には准尉殿から、外泊まちがいなしに貰えるんだ。ねえ、准尉殿。」軍曹は湯呑茶碗を准尉の前にはこんだ。「こら、当番、笑うない！ おかしい？ 何がおかしい。」彼は鼻筋のとおりしたし、部屋の入口のところでストーブをたいしている中隊当番の二等兵に右眼をとじてウィンクした。しかし彼の眼はすぐにも准尉の前の木谷のところにもどって行った。靴下の上に巻脚絆をつけて上靴をはいた中隊当番は軍曹の強制的な笑いに会って立ったり坐ったりした。准尉の横の人事係上等兵は笑ったが、二等兵の彼は笑う資格をもたなかった。木谷はこの軍曹が気になった。軍曹が彼の方をときどきみては曹長と何か話合っているからだ。——曹長は彼が恐れている以前の自分を知っている人間だった。彼は隊にいたときはいつもこの曹長から給手を支給された。この曹長も他の隊の曹長と同じように受領印の印判の手入れがやかましかった。彼もまたこの曹長に竹刀でなぐられ、印判を頭の毛でこすって掃除された。——

「よう。かえってきたな。」曹長は彼をみたとき言った。曹長の言葉はすぐ人情的になった。「お前がはやくかえってくるの、待ってたんだぜ……ふうん……ようかえってきた。……」曹長は頬と鼻筋のはそい弱々しい顔をしていたが顔色は桃色に近いあかさなので、その弱々しさは補われていた。木谷がしっているのはこの曹長だけだった。（なぜ、この野郎はみんなと一様に外地に行きやがらなかったんだ。）曹長はときどき彼の方にやさしくわらいかけてきた。そして曹長は体を前後に振った。しかし木谷はその笑いを信じなかった。

木谷は、この部屋では曹長だけをしっていた。いや彼はこの部屋を知っている。この事務室で中隊当番をつとめ、事務室のお茶わかし、伝令、掃除、はしりづかいをした。いま当番が苦しげに坐っているように入口の左側の壁に向い、（ああ、ちょうど、独房の壁に向うように）坐っていたことがある。いつ何時、無理な命令が出ようと、それによび出されなければならない身体。その当時ストーブにたいしていた

のは石炭だった。しかしいま中隊当番は薪を取り上げて、火口につつこんでいる。（それは刑務所でも同じことだった。）それに曹長の後にあるあの色塗りタンスは置いてなかった。

四

「フルル……フルルル……」「フルル……フルッ……フルルル……フルル……フルー」事務室のすぐ横で馬が鼻を鳴らし、それから馬の蹄の音が、コッポ……コッポ……コッポ……として急に止まって静かになると「ばかったれ！ 鉄！ 鉄！」馬取兵がどなっている。そして隊長室の戸がぱたんとあけられた。

「おい！ 当番、当番！ あつて茶をくれ！ あつて茶を！」隊長は細いのがった声でさげんだ。狭い部屋のなかをぐるぐるまわって寒さと糞糞とおさええているのが、その長靴のかかとの音ではっきりわかる。隊長室は事務室のすぐ向い側にある。そして事務室の空気が変わる。とする。

「おい、当番！ 当番！ 谷田、谷田はいないのか？ いなければだれでもいいから、もってこないか。」

「はいッ。」中隊当番は「隊長の当番どい行きやがったんやろ、」と言いながらドアをあけて隊長室に湯呑茶碗を取りにとんで行った。

准尉は机の下で股を大きくひらいてのんびりしていた。彼だけが隊長のはこんできた緊張した空気のなかでゆったりかまえていた。中隊当番が隊長の湯呑にお茶を入れて隊長室にもって行って帰ってきたとき、彼は言った。「さあ……行くかな……木谷……たて……隊長に申告しろ。」

木谷は立ち上ったが、彼は自分の右手、部屋の右側、曹長とは反対の壁のところに席をもっている一人の一等兵が自分の方をじっとみつめていたのに気づいて、ぎょっとした。彼は細い顔をして大きい眼をしていた。木谷は眼をふせた。一等兵は頬づえをついて、じっとみつめていたようだった。

「はいります。陸軍一等兵木谷利一郎参りました。」木谷は事務室を出て隊長室にはいつて行ったが、そこには隊長当番のすらりとして一見して粹な（木谷にはそう見えた。）谷田上等兵が来ていて、火鉢に火をつくっていた。

「申告します。」

陸軍一等兵木谷利一郎は……

しかし隊長当番は木谷の上に重々しくのしかかった。彼の口は動かなかった。

「待て！ 当番、谷田、お前しばらく外に出ておれ。」准尉は隊長の当番兵に向って言った。

当番兵は准尉の言葉の前で小さい反抗をした。彼は隊長の方を見返した。そして彼は「帰ります。」と小さい声で言った。

「申告します。」

陸軍一等兵木谷利一郎は……

木谷は申告をおわって、まだ大げさにうなずいて首をふっている隊長の方をじっとうかがった。彼の前にはまだ独居房のあの格子戸があるようだった。

「今朝、自分が向うまで行ってつれて参りました。二、三の注意事項もきいて参りましたが、木谷はもう刑をすませた兵だから、どんなことがあっても決して他のものと差別するようなことがないように特に注意してくれとのことでありました。」准尉はしずかに近づいて行って、力をぬくようにした低い声で報告した。

体の小さく特に足の短い隊長は軍袴の胸のところを特別につくらしてふくらませ、細い袖の上衣をつけ、さらに細い長靴をつけて補っていたがその自然条件をどうするというわけにもいかないうようだった。彼は小さい鼻、小さい眼をした小さい顔をまた大げさにふりたてた。

「二、三の注意事項？ よし、わかった。御苦労だった。立沢。よからう。」准尉は微笑した。

「何をしたんだ？」隊長は突然木谷の前にあるき出した。「何をした

んだ？」

「窃盗であります。衛兵勤務中のことであります。」准尉は言った。「うーん。」隊長のうなり声は少しばかり大きすぎた。「どの衛兵だ？」「枚方火薬庫であります。」

「誰からとったんだ……」

「巡察の週番士官からであります。」「うーん……」

隊長のうなりはまた少しばかり大きすぎた。木谷は小学校、つとめ先、軍隊、刑務所、あらゆるところで習ったとおり、頭をたれていた。

「第一班へ入れようと思いますが……」准尉は言った。

「班長をよべ。」隊長は言った。

「班長はいま教育中であります。」准尉の声は低くなった。すると彼はやはり隊長を軽蔑しているのだ。

「じゃあ……、あとで俺のところにくるようにつてくれ……よいか、立沢……」隊長は、顔を前につき出して、兎のように小さい眼を准尉の方におしつけた。准尉は、「はあ、承知しました。」とつつ立ってままた言った。

「木谷、木谷だな……もう二度とひとのものをとるなんてことをするんじゃないぞ……、お前その精神をきたえあげてきたか、どうじや！」

隊長室を出ると准尉は中隊当番をよんで言った。「一班の班長をよんでこい……兵器庫でねているだろう。」

中隊当番は隊長室から三つ目の兵器庫の戸をたたいた。

「誰だ？ 誰もいないぞ。」と内から太い声がした。

「吉田班長殿、吉田班長殿。」

「いないぞ——誰もいないつたら……」

「吉田班長殿、准尉殿がおよびです……」

「何？ 准尉殿？ それを、早く言え……それを……当番！ はやく言いなさいようつたら。」内の声は甘えたような女の口調になった。

五

木谷は吉田軍曹のあとについて、二階の内務班の方へ上って行った。廊下の銃架には銃が長く冷たく並んでかかっていた。谷間のようにくらいへこんだ部屋には、すでに毛布を四つ折にしてたんで置かれた寝台がならんでいた。油の匂い……重い冷たい匂い……木谷はまた帰ってきたと思った。彼は准尉が自分の傍にいないので自由になっていた。

階段を上りきった右手にならんだ二つの班長室の左手、一班、二班の班長室で吉田軍曹は事情をきき取ったが、彼は木谷に何年いたのか、苦しかったろう……給手はよかったか……中隊もかわったろう……などと簡単なことをきいたきりで、その点にはなるべくふれないようにしていた。彼は班長室のなかをせかせかと机から机へととびまわった。「なんだい、仕様のないやろうだな……大滝伍長のやつ。ひとのクリームをだまってつかいやがって、あとはほったらかしにしてしまいやがる……。あああ、このざまは、……パンにこんなにジャムをぬりたくりやがって……」隅の机の上にはパンの腹に赤いジャムをねっとりつけた塊がすてであった。

「まあ、皆がかえってきたら、身廻り品ももらってやるからな。」吉田軍曹は机の上の鏡をのぞきながら言った。「准尉さんも言うてたけど、お前のこれまでのことはな、この隊内には絶対にもらさないことにしてあるから、その方のことは、お前も全然気にかけない……な……心配な点があったら、いいにこいよ……な。」彼は鏡から眼をはなさなかった。「おつ、とつとつとつ……このやろう……。ほんまに……大滝伍長のやつ……。どこへ行ききさった……とつちめてやらな……いことには。」

木谷は相手の頬から立ち上るいい匂いをかいだ。軍曹は、その肉の薄い円形の顔に白い色がうき出すほどにもクリームをすりこんでいた。彼は額の生えぎわにまるく剃刀をあてさせており、もみあげのと

ころを切りたつようにそりこんでいた。これをみただけですでに軍隊に一年以上いる木谷には彼が下士官のできる限りのわがまをしてくるということがはっきりわかるのだ。彼は軍隊のあそび人だ。なまけものだ。軍隊にはときどきこのような訓練とはもつともかけはなれた人間がいる。木谷は吉田軍曹を軽蔑した。しかし彼はおとなしくしていた。彼は吉田軍曹が鏡を手ばなして横の壁のところにつくられた整頓棚の方に立つて行ったとき、じっとそのまるい背に眼をそそいだ。彼はこの軍曹の背後から何かやりそうな自分を感じた。刑務所で作業中ふと看守のうしろからとびかかりたいと感じることがあるように。軍曹の背は彼の心をさそうに十分なほど彼に無関心だった。

「すまんが、木谷君、ストープをちょっとみてもらえないか。」吉田軍曹は棚の上の小さい手箱の引出しから白い襟布を出して言った。木谷はぎくつとして立ち上った。彼は黙ってストープのところに寄って行った。

「いやすまん、——あ、おれがしよう。まだ君を使うのはすまんかな……。お前の同年兵はもうだれもないだろう？」

木谷はそのストープのところにあるいて行って、ダルマ・ストープの口をあけて傍の木切れをつつこんだ。

「おーい、誰かいらないか！」突然吉田軍曹は立つて壁をにぎりこぶしで打った。

「はい。」内務班から兵隊達がやってきた。彼らはドアをたたたく。

「はいれ。」吉田軍曹は言った。「おーい、薪がないぞ。もつとばりばりもってきてくれよ。なあ、お前たち、なにしろんだ……この俺を水づめにもして夏までおいておくつもりかい。」

「はいります。」だらりと頭を一つさげて、やせた兵隊がはいってきた。

「誰だ？ 誰がきたんだ？ もとえ！ かえれ、かえれ。」

「班長殿。今井でんがな……。」

「今井でんがなとは、何だ。誰がきたのかわからんぜ。」